



大龍・ラマ14世殿下お言葉入りポスター

映画事業実行委員会

映画『典座—TENZO—』への想いと

カンヌ国際映画祭

全国曹洞宗青年会 映画事業実行委員長 河口智賢

全国曹洞宗青年会(以下全曹青)で製作した映画『典座—TENZO—』が、今年フランスで開催された第七十二回カンヌ国際映画祭・批評家週間「特別招待部門」へ正式出品されました。

カンヌ国際映画祭は世界三大映画祭の一つに数えられ、言わずと知れた世界最高峰の映画祭です。『典座—TENZO—』は、国際批評家連盟が主催する「批評家週間」という上映週間に特別招待されました。その批評家週間の代表ディレクターからは選出の理由として「単純さと深さに魅了された、何としてもこの映画をカンヌで上映したかった」と有難い言葉をいただきました。

全曹青からは七名が渡仏し、現地では常に搭袈裟した姿で街を歩き映画の宣伝に励みました。その中で本当に多くの方が私達や禅に対して関心を抱いていることを伺い知ることができました。そして公式上映を迎



文化庁が出展したジャパンパビリオン（精進料理パーティ）の様子

え、私は舞台挨拶で「私たち僧侶も一人の人間です。時に苦しみ葛藤しながら日々を生きています。それでもいつも人々の心に寄り添う仏教の素晴らしさを伝えたいという思いで、この映画を製作しました」と映画に込めた思いと私たちのメッセージを伝えました。世界の大舞台という緊張の中、上映後には観客と世界中の映画関係者から称賛の拍手をいただき私達の想いが伝わったことに安堵し胸を撫で下ろしました。

その様子は、日本また世界中のメディアに取り上げられました。今回のカンヌ国際映画祭では、世界が日常の中にある禅の教えと、ありのままの私達の姿を受け入れてくれたことが何よりも有難く、この経験が現代における僧侶像の新たな指針と大きな支えに繋がると確信に至るものでした。

この映画は、道元禅師が遺された『典座教訓』を紐解き、食を通した御教えから命の尊さと「今を生きる」ことのあり方を現代社会へ提示しています。東日本大震災以降、私たちは今こそ仏教と信仰が必要であり求められていると感じます。そして本物の僧侶が悩み葛藤する等身大の姿と、東日本大震災という未曾有の大災害で全てを失った僧侶の姿から、信仰のあり方を身近に捉えてもらうことをテーマに物語を描いています。お寺離



カンヌで取材を受ける河口委員長・富田克也監督・倉島隆行全曹青顧問（左から）



●執筆者プロフィール  
映画事業実行委員長  
河口智賢

曹洞宗山梨県青年会所属  
第21期に教化法式委員長、第22期に副会長  
を務める。第22期から、事業担当として、  
また主演として映画『典座—TENZO—』  
事業に取り組んでいる。

れ、少子高齢化、過疎問題など寺院を取り巻く環境の  
変化と、多様化する現代に生きる青年僧侶として、お  
釈迦様の御教えを、私たち生身の僧侶の体を通したあ  
りのままの姿から仏教の尊さを表現する必要があるま  
す。私達は今こそ求められている。仏教の素晴らしさを  
人々に身近に感じてもらい、そして現代社会だからこそ  
信仰が必要だということを伝えなければなりません。  
現代に生きる青年僧侶の熱い志を、この映画を通して多  
くの方々にご覧になっていただければ幸いです。  
現在、全国順次公開中です。フランスでの公開も決  
定しています。詳しくは『典座—TENZO—』公式  
HPをご参照ください。  
映画『典座—TENZO—』オフィシャルホームページ  
<http://sousei.gr.jp/tenzo/>